

モード Mode Mode は語る

中野 香織

システム化せず潮流超える

ファストファッションの隆盛で、洋服は大量消費され、半年もたずに消えてしまうものになった。一方、巨大ブランドグループの市場支配で、トレンドは膨大な資本を投下した宣伝やマーケティングで恣意的に作り出せるものになった。

そんな潮流を超越し、時代を超え、着続けられる服を創り、広告も一切行わないのに25年間も独立ブランドを保ち続けるデザイナーがいる。ベルギーのドリス・ヴァン・ノッテンである。小物は作らず、メンズとレディースの洋服だけで世界と勝負する。そんなドリスに1年間密着して

ドリス・ヴァン・ノッテン



撮影されたドキュメンタリー映画が公開された。ライナー・ホルツェマー監督による「ドリス・ヴァン・ノッテン ファブリックと花を愛する男」である。

世界中に特注した生地が並ぶアト

リエ、ショーの舞台裏、インドの刺繍（ししゅう）工房、そしてアントワープ郊外の邸宅での暮らしなど、ドリスの創作人生の全てが明らかになる豊潤な力作である。

なぜ彼は時代の波にのまれずに成功したのか、驚きとともに腑（ふ）に落ちたことがある。彼が服作りの過程を人生そのものの反映とみなしていることである。素材から全力を注いで作り上げるという姿勢は一貫しているものの、仕事はシステム化されていない。変化に富んだ人生に身を置きたいと考え、毎シーズン、自分自身に驚きを与えるような服作

りを目指す。「醜さ」に心をざわつかされ「きれいなもの」にヒントを得たら、それも反映させながら。

賛否両論を浴びることもあるが、つらいときは「耐え忍ぶ」。インドの刺繍工房に駐在員をおいてまで仕事を発注するのは、彼らの職人技術が失われないようにするため。そんなドリスの生き方や考え方が、美醜をぎりぎりのバランスで配合された存在感のある服に反映されて輝き、その服にこめられた誠意と情熱は、時代を超えて人を魅了する。瞬間を最大限に生ききるデザイナーが一貫して続けているのは、仕事と生活を自分でコントロールして楽しむための努力である。生きることを楽しむ、これを「人生の成功」と呼ばず、なんと呼ぼう。（服飾史家）